

文人山中信天翁の交友関係と書画文玩

―「没後一三〇年 山中信天翁と幕末維新」展補論―

豆田 誠路

一 はじめに

(一) 本稿の目的と山中信天翁について

本稿は、平成二七（二〇一五）年一月から三月にわたり碧南市藤井達吉現代美術館で開催した「没後一三〇年 山中信天翁と幕末維新」展（以下「本展」という。）を振り返るとともに、本展では詳しく触れられなかった文献等の検討を通じて、本展の内容を補足することを目的とする。そのため、本展の内容については本展図録を参照されたい。¹

なお、本稿の主題である山中信天翁（一八二二～八五）は、現在の愛知県碧南市出身の幕末維新期の文人である。信天翁は静逸と共に号で、諱は猷（まこと）という。篠崎小竹、斎藤拙堂に師事し、京都へ上って勤王の志士と交わるなかで岩倉具視の知遇を得、維新後官吏として明治新政府の立上げに尽力し、明治六（一八七三）年に退隠した。

以後、京都の下鴨や嵐山の山荘「対嵐山房」で文人として悠々自適の生活を送り、明治一八（一八八五）年に死去したという人物である。²



山中信天翁
(碧南市蔵)



山中信天翁《水墨山水図》
(明治7年、碧南市藤井達吉現代美術館寄託)



『山中信天翁没後百年記念目録』
(碧南市蔵)



『信天翁』(碧南市蔵)

(二) これまでの展示・刊行歴と本展の構成

それではまず、本展を開催するまでに、山中信天翁は展示や書籍等どのように取り上げられてきたのであろうか。このことを出生地碧南とそれ以前に分けて整理しておきたい。

ア 出生地碧南での展示・刊行歴

まず出生地碧南では、次のような展示や書籍の刊行などが行われてきた。

大正四 (一九一五) 年 (没後三〇年)	『信天翁』(信天会)
昭和一〇 (一九三五) 年 (没後五〇年)	山中信天翁五十周年祭・遺墨展覧会 (五十周年祭奉讃会)
昭和五〇 (一九七五) 年 (没後九〇年)	「山中信天翁遺墨展」 (碧南文化協会・碧南市文化財専門委員会)
昭和五四 (一九七九) 年	「山中信天翁遺芳展」 (碧南市文化財専門委員会)
昭和五六 (一九八一) 年	『碧南市文化財 第四集 信天翁遺墨集』(碧南市教育委員会)
昭和六〇 (一九八五) 年 (没後一〇〇年)	「信天翁没後百年展」 (記念目録『山中信天翁没後百年記念目録』碧南市教育委員会)
平成二五 (二〇一三) 年	『山中信天翁物語』(浅井久夫著、碧南市教育委員会)
平成二七 (二〇一五) 年 (没後一三〇年)	「没後一三〇年 山中信天翁と幕末維新展」

以上のとおり、山中信天翁の出生地である碧南市では、「没後〇年」という節目節目に、また折に触れて山中信天翁の顕彰に努めてきたことが分かる。昭和五十六年刊行の遺墨集では副題に「郷土の先賢」と付けられており、そうした観点から遺墨展の開催や遺墨集の刊行がたびたびなされてきた。

イ 出生地碧南以外での展示・刊行歴

次に出生地碧南以外では、どのように取り上げられてきたのであろうか。山中信天翁の作品が取り上げられた展示は、管見の限りで次のとおりである³。

平成九（一九九七）年 京都国立近代美術館・東京国立近代美術館

「文人画の近代―鉄斎とその師友たち」展

平成一三（二〇〇一）年 大津市歴史博物館

「知られざる日本絵画

―シアトル白澤庵コレクション」展

平成一八（二〇〇六）年 成田山書道美術館

「近代文人のいとなみ」展

平成二七（二〇一五）年 碧南市藤井達吉現代美術館

「没後一三〇年 山中信天翁と幕末維新」展

平成二七（二〇一五）年 天門美術館

「没後一三〇年 山中信天翁展」

まず「文人画の近代―鉄斎とその師友たち」展（京都国立近代美術館・東京国立近代美術館共催）では、富岡鉄斎（一八三六―一九二四）の師友の一人として信天翁の作品が紹介された。信天翁の他に藤本鉄石（一八一六―一八六三）、江馬天江（一八二五―一九〇一）、村山半牧（一八二八―一八六八）、板倉槐堂（一八二三―一八七九、江馬天江の兄）らの作品が紹介されたが、彼らはまさに信天翁の交友関係とも一致しており、文人画の観点から信天翁の交友関係を示した先行事例といえる。

次に「知られざる日本絵画 ―シアトル白澤庵コレクション」展（大津市歴史博物館）では、展覧会の企画にポール・ベリー氏（美術史家）が関わり、白澤庵コレクション所蔵品が紹介された。信天翁は幕末・明治の文人画家の一人として取り上げられ、作品五点が展示された。

また「近代文人のいとなみ」展（成田山書道美術館）では、漢詩文や煎茶をめぐって、文墨に親しむ人びとを広い意味での「文人」として扱い、明治前半期における詩文書画の混沌としたいわゆる「文人たちのいとなみ」に焦点を当てた展覧会である。ここでは信天翁のほか数多くの文人の作品が紹介された。なお本展開催の後には、大阪府枚方市にある天門美術館で、山中信天翁作品の単独展が開催された。

以上、出生地碧南以外での展示・刊行歴をながめると、信天翁は文人画家の一人として、また富岡鉄斎の師友の一人として評価されていることが分かる。また明治前半期の京都文人の一例としても取り上げられている。

しかし、そもそも山中信天翁とはどのような人物かを史料に即して紹介した展示がこれまでにないことが課題として挙げられる。

ところで「近代文人のいとなみ」展では、明治前半期に活躍した文人が多く取り上げられており、そのなかで近代文人のいとなみの代表的な例として、信天翁と近い江馬天江をめぐる文人たちの交流を、詩文書画や篆刻を通して俯

瞰している。この先行展示の成果を本展に惹きつけて検討すると、山中信天翁を中心に文人たちの交流をみることで、江馬天江の事例と比較検討できるのではないか。そのことで京都文人の活動事例を蓄積することができるのではないかと意識した。

こうした課題意識で展示作品の調査を行った結果、各所蔵者より信天翁の詩文書画や煎茶道具などの情報を数多くいただくことができた。そこで、本展では文人画に限定せず詩文書画や煎茶道具などを紹介し、信天翁の文人活動の多様な側面を提示することにし、次のような展示構成とした。

- 第一章 序 山中信天翁とは
- 第二章 勤王の士・山中静逸
- 第三章 文人・山中信天翁
- 第四章 信天翁亡き後

(三) 山中信天翁の絵画の評価

前節では、これまでの展示歴から、信天翁が文人画家の一人として取り上げられたことを指摘した。では、信天翁の文人画はこれまでどのような評価がなされてきたのであろうか。本節では、三名の評者の見解を参考として掲げる。まず、脇田秀太郎氏は『國華』誌上で信天翁の作品《松石靈芝図》を紹介するにあたり、信天翁の画について次のように言及している（―引用者加筆）。

（前略）彼は元來勤王の志士で、（中略）単なる画家者流ではなかった。多芸だったがその中では忠烈剛直の顔真卿の争座居帖を学んだという書と、書に並んでは画であると言えよう。ここに紹介の松石靈芝図は一見して鉄斎を思出させるであろう。この樹容や靈芝、殊には松葉の描法は鉄斎にそっくりそのままのものがある。勤王家を取扱った歴史画のあるのも両者に共通しているが信天翁は鉄斎より十四歳の年長で若き鉄斎の尊敬する一人であった。（中略）信天翁の画は磊落で稚拙ではあるが一氣の貫串を身上とすると評し得よう。今仮に鉄石、鉄斎、信天翁と並べれば鉄石は筆に優り、鉄斎は独自の筆墨兼備の大画人、信天翁は氣に秀ずと見るべきであらう。（以下略）⁴

次に、「文人画の近代―鉄斎とその師友たち」展を担当した加藤類子氏は、同展カタログのなかで信天翁の文人画について、次のように言及している。

信天翁の絵は素人の幼さが残る、幕末文人画の特徴をよく表した作品であるが、書を愛した人らしく、彩色は殆

ど施さず、続本と呼ばれる縹子のような絹地や和紙に、明快かつ豪快な墨線によって山水を描いている。⁵

最後に、ステイヴン・アデイス氏（カンサス大学教授）が『三彩』誌上の「幕末・明治の画家たち(7)」というシリーズで信天翁を取り上げた論稿の一節を取り上げる。

一九世紀の中頃から末にかけてはプロの南画の大家達が輩出したのであるが、文人画家というアマチュアの流れもまた繁んであった。この一群の画家達の中で最も代表的かつ重要な三人の画家が信天翁、（村瀬：引用者追加）太乙そして（土井）聲牙であり、彼らはその生涯と芸術活動の中で文人精神をあますところなく表現したのである。もし彼らの絵が同時代のプロの画家達ほどには技術的に秀れていないとするならば、彼らは構想の大胆さと画風の自由さでそれを補っている。

（中略）

信天翁は中国文人の伝統に厳密に従っているうちに、個性的な作品を生み出すことに成功した。その最後の例として、石を賛と共に中国的な方法で描いた作品がある（中略）全てが中国の先例に従ってはいる。しかし着想の奔放さ自由さそして形状のいびつさは、信天翁独自の表現を伝えている。文人の伝統を大きな自信と強い個性をもって明治初期にもたらしたその能力によって、信天翁は南画の歴史に貢献しているのである。⁶

氏の論稿は全て紹介できないが、氏は信天翁、村瀬太乙（一八〇四～八一、絵を嗜む風変わりな儒教教師として犬山や名古屋で有名）、土井聲牙（一八一七～八〇、伊勢の文人芸術家として評判）の三人が、文人画の伝統を独特に個人的に変容させることを成し遂げたと評価する。また信天翁に対しても紙幅を割いて先述のように評価する。

このように、信天翁の文人画について、三名の評価を紹介した。これらは、専門画工ではない信天翁の技術面だけで評価するのではなく、詩文書画や煎茶など多芸な文人としての向き合い方を含めて理解し評価すべきことを指摘しているように思う。

以上の評価を踏まえながら、本展でも信天翁の文人画を紹介することにした。

(四) 本展で明らかにしたこと

以上の課題意識のもと、各所蔵者からの資料・作品の拝借により、本展で主に次のことを明らかにした。

第二章「勤王の志・山中静逸」では、山中信天翁の経歴について紹介した。静逸は信天翁のもう一つの号で、歴史資料では「静逸」のほうが多く頻出するため、これを章名とした。

信天翁は、大坂で篠崎小竹、津で斎藤拙堂に学び、そこで身につけた漢学を中心とした教養をもとに京都へ上る。そこでは、文久三（一八六三）年に朝廷に建白書を提出し、「攘夷主義」により日本の国防強化を主張した（議奏雜記建白書抄録）国立公文書館蔵（パネル展示）。しかし同年八月の政変で尊王攘夷派は京都から一掃され、信天翁は京都郊外の修学院村に隠棲する。その状況のなか、やがて岩倉具視の知遇を得、明治新政府では徴士として内国事務局権判事を始め、石巻県権知事、伏見宮など三宮家の家令を務めた。明治六（一八七三）年に退隠したのち、明治一〇（一八七七）年には嵐山に築いた新邸・対嵐山房に明治天皇が臨幸された。以上のことなどを史料に沿って紹介した。こうした機会は初めてのことであった。

第三章「文人・山中信天翁」では、文人画に限らず詩文書画・煎茶道具などを紹介した。特に幕末に信天翁と交友があった藤本鉄石《山水図》（出品番号41、以下同じ）、村山半牧《那知山瀑布図》（42）（共に信天翁への為書あり）という作品、松平春嶽《扁額「四時嘯雪處」》（59）、三条実美《扁額「信天」》（58）、木戸孝允《五言古詩》（61）という作品も紹介した。また煎茶道具等も紹介した。

ここからは、文人としての多芸さや、作品の贈り主にみる信天翁の交友関係などをうかがうことができる。

しかしこれら展示作品から断片的に明らかにされた山中信天翁の文人活動について、もう少し丁寧に説明すべきと考えた。そこで、次章からは本展の補論として信天翁の日記やそれ以外の資料をもとに、信天翁の文人活動をみていくことにしたい。

三 信天翁の日記にみる文人活動と交友関係

(一) 明治六（一八七三）年の退隠前まで

本章では、本展の補論として文献にみる信天翁の文人活動をみていく。底本は「信天翁日記鈔」（『信天翁』信天会、

一九一五年）である。ここで掲載されているのは、明治二（一八六九）年九月一三日、すなわち石巻県権知事として赴任してから、亡くなる一年前の明治一七（一八八四）年七月一四日までの記事である。但しこの日記には明治一五（一八八二）年以降の記事が少ない。また全ての見聞を記していると限らないので、信天翁の活動の傾向を捉えることを主眼に置きたい。

まず、次の記事がみられる。

（明治二年一〇月）

二十四日、（中略）牡鹿郡内尾浦と申処に刀砥、外砥石、桃生郡雄勝浜に硯石上品あり、ヌマソニと唱ふ、一大瓜石、井内石、此二石は敷石類に適す。

明治二年九月に石巻県権知事として着任した信天翁は、早速県政に取り掛かった。管内視察のため各郡に出張した信天翁は、雄勝硯などに出会う。現在の宮城県石巻市雄勝町産の石は雄勝石といい、硯を産するために採掘された歴史は室町時代まで遡るという。この雄勝硯は文人活動の上で気になる存在であったのであろう。石巻県管内の状況を把握することが主眼であった信天翁が、このことを思わず書き留めたものとみられる。

信天翁はそれから約一年後の翌年九月末に、石巻県から合併した登米県の知事を命じられた。しかし数日して辞表を提出し受理され暫く東京滞在を命じられた。そこで信天翁は、年末に伏見宮家令を命じられ京都へ移る迄の間、東京で文人活動を行う。

（明治三年閏一〇月）

六日、三囲稲荷社にて、松堂玩具を、高木文魁兩人にて、展観、小川、日下部、堀、諸子と同観、膽景鳳、唐詩草書大幅、別而妙品、玉九顆印刻ともに頗る奇、其他、黄道周、建中銅等陳列。

二十一日、奥蘭田、橋場之欸乃村莊へ被招、北川太史、堀皆春、同行、趙瑞図山水、王鐸杜詩書卷、頗妙品。

二十五日、（中略）訪北川太史、観古尊、大宝年中郭某作、銅牛香炉二品共、奇品。

二十六日、岩谷太史招飲、長松少弁、川田甕江、柴原順治之諸人来会。

（一一月）十九日、土州容堂老人之田中別荘にて、古書画銅玉筆硯墨一々陳列、多有奇品。

十二月一日、内田中助教を尋ぬ、秋月民部大丞、町田大学大丞と同観、葛徴奇山水々墨、頗る名軸、斑竹卓、尤奇品。

東京滞在の間、明治新政府で官吏を勤める文人らと書画文玩を鑑賞している。

まず信天翁は、奥蘭田（一八三六〜九七）の東京堀切にある別荘・欸乃邸に招かれた。奥蘭田は和泉国出身の海産物商で、維新後は米穀と肥料を業とし、のち東京商業会議所副会頭（初代）、衆議院議員を歴任した人物である。また自蔵・知人蔵の煎茶注春（茶瓶）三二種の図録『茗壺図録』（明治九年）を刊行したことも知られる。信天翁は、彼の別荘で明末の書画家で「邢張米董」と称された張瑞図の山水図などを「頗る妙品」と賞した。

次に一月一九日条にある「土州容堂老人」とは、幕末の土佐藩主で、訪問当時麝香之間祇候の優待を受けて隠棲していた山内容堂（一八二七〜七二）のことである。信天翁は容堂の別荘でも多くの書画文玩を展覧し「多く奇品あり」と記す。

また一二月一日の展覧では、信天翁が葛徵奇筆の《水墨山水図》を「頗る名軸」と記す。これは、山内容堂がその侍読で土佐の学者元老院議官松岡時敏に贈ったといわれる葛徵奇筆の同名作品のことであろうか。

このように、石巻県権知事と伏見宮家家令という役職の間のわずかな期間、東京にて奥蘭田や山内容堂らと交友し、書画文玩を展覧したのであった。

やがて伏見宮家令を命じられた信天翁は、この年の年末、伏見宮家が住む京都に移った。翌明治四年四月、九月、一〇月、明治五年正月の日記に次のような記事がある。

（明治四年）

四月一日、（中略）靈山に而、鉄石首級を葬り、未亡人その、備前より上京に而、都下懇意之者共、同山に而相会す、紅蘭、宇田、頼、江馬已下凡二十人余。

十九日、（中略）此夕、天江、卓斎、鉄斎、梅僊、素心、雲濤来。

九月十六日、頼山陽翁四十年、同肆庵十六年、同三樹十三年、合祭、月波楼に於て、古今書画を展覧す、盛会なり、祭主支峯。

（十月）六日、藤井竹外、自没六年、長楽寺、竹外醉土墓、漸立、其門人市村水香、幹事にて友人会於円山左阿弥。十六日、柳唐亡父三回忌、円山にて書画会、此日西六条博覧会を一見、次に円山へ回る、（以下略）

（明治五年正月）

十一日、河野家、梁川紅蘭を訪ひ、夕方梧窓より煎茶に招かる。

十三日、夕、九条邸、庭中林泉等、市中之者に貸与、酒楼茶店を開き、頗る遊覧に宜し、清雅堂に小集、江馬天江、耕石、香谷、竹雲諸人と会す。



松平春嶽
(福井市立郷土歴史博物館蔵)

ここからは、信天翁の幕末以来の交友関係をみることもできる。信天翁は早世した弟猷の遺志を継いで京都へ上ったといわれるが、弟猷が生前親交があったとされるのが藤本鉄石である。そうしたこともあり信天翁は梁川星巖（一七八九〜一八五八）や頼三樹三郎（一八二五〜五九）とも近かった。星巖の未亡人・梁川紅蘭（一八〇四〜七九）や頼支峰（一八二三〜八九）、江馬天江や富岡鉄斎らとも交友があった。日記記事からは、こうした亡き師友を偲ぶ集まりに書画会が開かれており、頻繁に開かれる書画会への参加を通して、文人サークルが形成されている点に着目しておきたい。

この後、信天翁は伏見宮家が東京に移られるのに伴い随従する。その東京では明治五年四月一六日の日記記事に「容堂、春嶽、伊達諸老を訪ふ。」とある。この諸老とは、すなわち元土佐藩主山内容堂、元福井藩主松平春嶽（一八二八〜九〇）、元仙臺藩主伊達慶邦である。

このうち、春嶽については、先述のとおり本展で扁額一点を展示した（松平春嶽《扁額「四時嘯雪處」》⁽⁵⁹⁾）。これは、ちやうど日記記事と同じ明治五年に「信天雅伯の為に書す」とある書である。なお、春嶽の遺品にも信天翁の名が登場する。それは松平春嶽の遺品を核とする福井市春嶽公記念文庫にある明治二年序「書画帖」である。一八名の揮毫者による書画帖のうち、三番目に信天翁の詩画「梅花春色」（明治二年二月）がある。信天翁はこの書画帖のなかで「明治維新の際に政治的に関わりのある人物」の一人とみられており、信天翁と春嶽の文人としての交友がみとれる。その後も書画展覧の記事は散見されるが、宮家家令の公務が多忙ゆえか、記事もまばらである。

（明治六年二月）十六日、小梅小倉庵にて書画、煎茶、盆栽会に付、北川徳之、堀博等と罷越す。

（四月）二十三日、世古を尋ね、実翰齋帖を見る、十六冊にして頗る希有の物なり。

（五月）十五日、魁堂、鉄斎、上東、巖谷迂堂方にて小集。

（六月）十三日、（中略）内田正雄、瑞図山水、新護に付展覧に北川頼古と罷越す、大に悦目（以下略）

（七月）八日、桂華堂より米庵旧蔵小鑑を得たり、頗る愛すべし、価五円。

とあるほかは、明治五年九月一日条に

月波楼にて小集、頼、江馬、小林、富岡、片山、香谷、竹雲、清雅、得所、蔵六、墨叟、北茂、卯八等会す。

とある。明治五年八月に信天翁が仕えた伏見宮邦家親王が薨去され、京都相国寺に埋葬することになった。信天翁は、

宮家の家令として薨去後から葬歛の式までの実務を取仕切った。これを無事に終えた信天翁が、ほんの一時京都の同士と再会した記事である。

この後、明治六年七月一七日から二一日まで谷鉄臣^(てつおみ)(一八二二〜一九〇五)と熱海で過ごしている。これは同年八月三日の明治天皇の箱根行幸を前に熱海入りする機会に合わせたとみられる。

十七日、籃輿にて六時発、四里よし浜にて午飯、二時後熱海富士屋喜左衛門へ着、谷大湖^(鉄忠)先に在り、遂に其様に滞留す。十九日、大湖と天神之像を拝す、伝云、筑紫にて木像を自製せられ、七体を海上に流さる、其一ならんと、○拝観するに、凡立一尺位、木座像、裳の辺に貝が付き、いかにも古像なり、銘菅家直作とあり。

二十日、大湖と終日会語、扱技禅僧来る、頗る快人也、入湯功の奏するを覚ゆ。

二十一日、大湖と船にてよし浜迄行く、夫より陸路に而帰都の大湖と別る。

谷鉄臣(号如意)との親交の深さがみられる。本展では、谷如意・山中信天翁《題呉観竹石図詩》双幅(一八七九年、成田山書道美術館蔵)を紹介した。

谷は近江の医家に生まれ、早くから学問を好み、長崎でオランダ医学を学んで帰郷、彦根藩侍講となつて岡本黄石^(うしせき)(一八一二〜九八)と交流した。維新後、大蔵大丞、左院議官などを務めたのち明治六年に致仕。京都に帰って文墨に親しむ。特に煎茶道具の鑑定に長じ、山本竹雲と肩を並べた人物である¹⁰。

なお、「長浜曳山祭の曳山行事」(重要無形民俗文化財)に出る曳山の一つ、猩々丸の舞台障子腰襖三面が信天翁の筆になるものである。腰襖に描かれた画が《紙本金地墨画 松竹菊梅図》(明治七年、一六六・〇×一五〇・四cm)で、¹¹賛が谷鉄臣である。腰襖左の一面に「甲戌十月」とあるが、「信天翁日記鈔」より明治七年一〇月一五日から二〇日まで長浜(西川鎮寿堂なる場所)に滞在しており、符合する。よって、後日谷鉄臣が賛を書いたと推定されるが、信天翁と谷の関係が垣間見える図である。

また信天翁と谷は養正社という組織の社員総代を共に務めている。これは明治九年に内閣顧問であつた木戸孝允が後に京都府知事となる横村正直と共に設立したもので、明治天皇からのご下賜金四千元を基金とし、幕末に活躍した人びととその子孫が京都養正社の社員(会員)となつた。「明治天皇紀」明治十一年三月一四日条には、次のようにある。

十四日 京都府養正社社員総代山中献・谷鉄臣、霊山に鎮斎せる明治維新前後諸士の忠節を表彰せんがため、明治九年十月招魂祭執行の際賜はりし祭糝料及び有志の醸金等を以て、銅製の碑を霊山に建設せんとし、去歳、宸

筆の篆額下賜を請願す、天皇、幟仁親王をして靈山表忠之碑の六字を代書せしめたまふ、既にして書成れるを以て、是の日之れを養正社に下付す、養正社は、明治九年招魂祭を挙行せんとして有志の組織する所なり、

養正社の社員総代である山中猷と谷鉄臣が、銅製の碑を靈山に建設しようとし、御宸筆の篆額を下賜されるよう請願した。その結果、有栖川宮幟仁親王よりの「靈山表忠之碑」の書が養正社に下付された、という記事である。¹²

文久二（一八六二）年末に靈山で、安政の大獄をはじめとする幕府の弾圧で非命の死を遂げた志士らを祀る祭典が開かれ、京都の有力商人や尊王論を掲げる学者、諸藩の志士が参集した。この集まりに信天翁も参加している。¹³ 以来、谷らと志士の慰霊に尽くしてきた。

本展では、賛に信天翁の為に描いたと記す藤本鉄石の《山水図》や、同じく賛に「静逸山中先生」の為に描いたと記す村山半牧（一八二八〜一八六八）の《那知山瀑布図》を展示したことは先に述べた。藤本鉄石はいわゆる天誅組の変で亡くなった尊攘派志士であり、村山半牧は藤本鉄石とも交わり尊攘運動に関わった画家で、戊辰戦争のさなか郷里越後で自刃した人物である。

本展では他に、山中信天翁《児島高德題桜図》（明治一二年、個人蔵）も展示した。画題の人物である児島高德は南北朝時代の武将である。また画題は後醍醐天皇が隠岐の島に流されている途中の夜、天皇の宿所に潜入し救出しようとしたが果たせず、その庭にあった桜の木を削って詩を書いて残した。翌朝これをみた天皇が尽忠の士がいることを悟ったという故事に基づいたものである。

このように、信天翁には幕末京都で自身に身近な存在を多く失ったことと勤王思想があることは見逃せない。¹⁴

（二）明治六（一八七三）年の退隠後

信天翁は明治六年八月三十一日付けで宮内省に辞表を提出し受理された。これにより多忙を極めた信天翁は退隠し京都に住むようになった。日記では明治七（一八七四）年から明治九年にかけて、書画展観などの記事が頻出するようになる。ここでは紙幅の都合上全ての記事を取り上げるのが難しいので、いくつか絞って取り上げたい。

ア 奈良で同士と書画展観

明治八（一八七五）年四月一五日から二三日まで同士と奈良を訪れた。



木戸孝允
(「近世名士写真 其1」 国立国会図書館蔵)

十六日、東南院書画展観、槐堂先に在り、黄石、鳳陽、天江、鉄斎等昨夕着、面会、大仏の博覧会を見る「正倉院宝庫の御物を始め、法隆寺、談山、吉野、初瀬の諸仏陳列、殊に希代の品々驚目、午時より黄石、鳳陽、天江、鉄斎と初瀬扇屋に宿す。

この日の翌日から三日間は吉野を訪れたこの一行は、信天翁、板倉槐堂、岡本黄石（一八二二〜九八）、神山鳳陽（一八二四〜八九）、江馬天江、富岡鉄斎と、京都文人界の主だった人物が揃っている。

イ 木戸孝允との親交

信天翁は木戸孝允（号松菊、一八三三〜七七）とも文人としての交友がある。以下、信天翁の日記でみてみよう。

（明治七年六月） 十日、木屋町十二番伊勢小湊と小集、木戸松菊と会す、夜に入る。

（明治八年二月） 十五日、木戸松菊来る、余不在、夕方に国重を訪ふ。

十六日、北条の会、木戸、伊藤、諸家と会す。

十八日、木戸、府参事と舎密局勸業場を見る。

十九日、木戸東京に赴く、日々雪甚し。

（明治一〇年） 四月八日、木戸氏、国重氏、北条左兵衛来る、多忠克、先に来る。

（同年五月） 三日、（中略）木戸松菊を訪ふ、大病なり。

二十六日、午前六時十九分、木戸松菊死す、午後申す。

二十九日、木戸葬式、午前出棺、霊山の上に葬る、同所へ送る、贈正二位勲一等松菊大居士、覺是院と号す。

ちなみに木戸孝允の日記には、次のようにある。

（明治八年二月）

同十五日 晴、岡と在梅清雅山等の諸骨董を経観す、北条も途中より同伴せり、二字帰寓、四字過より岡・北条・在梅と山中静逸を訪ふ、不在、北条の別荘にて小憩小酌、七字過与諸子寄寓、国重・山中尋来る、談話、数字皆散す、夜微雪

同十六日 晴、(中略) 十二字より与岡骨董店に至り、直に井上の寓を訪、伊藤・井上等と北条に至る、山中・国重・榎村・瓜生・白石・林等も同席、九字頃帰寓 今日時々微雪あり

同十八日 晴、山中来話、井上 十一字頃より 所に至り其より西洋器械を以此度元隅屋敷にて織工

を始めしに付其模様を一見し又勸業に至る、伊藤も同行なり、是より山中・岡・榎村・余と鳩居に至り書画古道具を一見し、二字帰寓、山中也誘ひ帰る、四字頃より与榎村と祇園の歌舞稽古を一見し、七字帰寓、山中是与岡・在留守熊野三四郎来る夜戯に書画を試り(以下略)

同十九日 雪、十一字より谷鉄心を訪ふ、不在、国重・榎村を訪ふ、亦不在、山本覚馬を訪ひ暫時相語る、一字帰寓、山中・榎村・佐藤・国重・白石・谷口等暇乞に来る、七字過出発(以下略)¹⁵

信天翁と孝允の日記の記事が符合する。木戸孝允が信天翁の許を訪れ不在。その日から孝允が東京へ帰る迄の四日間、信天翁が孝允の許を訪れる。孝允が東京に戻る前日の夜には信天翁が「戯に書画を試り」とある。

木戸もまた書画を展覧し煎茶を嗜んだ文人であるが、文人と煎茶の関係については長谷川瀟々居が『煎茶志』で次のように記す。

明治年間の煎茶の社会的特性をあげれば、その以前の煎茶愛好家が多く社会の被支配階層の中に在ったものが、此時から上層の支配権力層との関聯を生じたことである。(中略) 明治期に於ける廟堂の実権者や経済界の実力者の中には旧幕時代、薩長土各藩の思想的指導者ではあつても階級的な立場からいへば寧ろ輕輩に属すべき人が多かつた。而も、煎茶を礼讀した頼山陽、田能村竹田などは彼等の常に崇拜し、或は親近措かざる人々であつたから、茲に於て煎茶は自ら水を得た魚の如き活潑な動きを示すに至つた。前代に其比を見ない急激にして且つ豪華な明治中期の煎茶の勃興は懸つてこの人々の影響力の結果であると言ふも過言ではない。殊に之は旧土佐藩主であるが) 山内容堂、木戸松菊などは官途にある者が概ね維新の動乱中、生死の境を往来した武弁で、その举措進退がとかく殺伐に流れ、動もすると暴力沙汰に及び、謂ゆる野人礼にならざるの風あるを憂ひ、故意に煎茶を奨励して人心を和らげ、礼儀を正さうとしたことが前掲の楓川画記に載つてゐる。¹⁶

信天翁も、旧幕時代の社会の被支配階層から維新の社会変動で上層の支配権力層に接近した一人であり、信天翁や木戸が煎茶を嗜んだこともこの流れのなかで説明できる。

また、引き続き木戸の明治一〇(一八七七)年四月の日記記事では



旧鈔左伝零本四卷
(『信天翁』所収)

同八日 雨、国重正文・北条太平と十一字より雨を冒し嵯峨に至り山中静逸を訪ふ、嵐山の花未帯紅一老樹已に綻んとするものゝ如し、雨中一人の俗客なし、評古物見古書（今釈伝佑二幅王思任の長巻等）話古今小酌四時余、五時過帰寓（以下略）¹⁷

孝允は雨のなか、信天翁の対嵐山房を訪れた。ここから見える見事な花見を楽しみながら、書画文玩を愛でる。そのような文人木戸松菊（孝允）と山中信天翁（静逸）の姿がみられる。孝允が亡くなったのはこの翌月であった。

ウ 大規模な書画会の展観・出品

信天翁はまた大規模な書画会への展観もみてとれる。日記では、

（明治六年）十一月六、七日、清雅堂追薦円山にて書画展観、煎茶席等設け大に盛なり。

（明治七年二月） 八日、山中吉兵衛追薦、網島にて明清書画展観あり、煎茶十席、盆栽瓶花二席、来人千三百人余と云、大に盛会。

（明治八年）十一月一日より 鳩居会をなす、書画を検査す。

六、七日、両日円山総てを借受け書画展観、煎茶九席幅数凡そ七百幅。

十五日、吉田山鳩居の康楽山荘に追薦会をなし、後、小集。

大規模な書画展観会に参加していることが分かる。特に、明治八年のそれは鳩居堂の主人・熊谷直孝の追善の為の煎茶会で、京都・東山の円山で催された大規模なものであった。翌年に刊行された『円山勝会図録』によると、信天翁も一三点出品したことが確認できる。

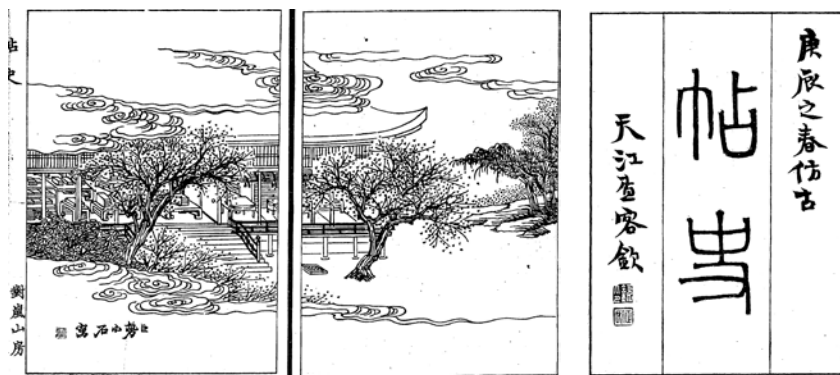
エ 書画文玩の収集

（明治一〇年二月）二十五日、百円、印材代、本願寺より受取、軸物代、二十五円送り来る。

（明治一二年） 八月一日、家隆公、木像、三円半、畑古雪より求む、布袋木像五円、在梅堂赤人の木像一円

半、畑古雪、神護景雲の経巻一、高弁の経巻一、左伝古写本四巻、五円、右西村兼文より求む。

十月二十五日、拝 聖廟、法帖、争坐位帖、聖教帖、代二十五円馬場氏へ渡す。



『帖史』
(国立国会図書館蔵)

(明治一四年五月) 十日、薬師寺を一見し、奈良博覧会を見る。

手箒筭二円半、銅紐印二円三十銭、古鏡二円、嵯峨箱四十五銭、金銅如意三十五銭、永仁古書三十銭にて求む、玉水竹屋に宿す。

(明治一五年)

四月十三日、紹陽三円、茂睡三円、紹益一円半、似雲三十銭、栗崎詩一円、九霞画半円、牡丹花五円、芳州一円、長好二円、芭蕉三円、予楽院二円半、にて求む。

これまで書画会展観が主であったが、明治一〇年から六年間には書画文玩の収集がたびたび見られる。

四 信天翁の日記以外にみる文人活動と交友関係

(一) 信天翁が会主となった展観会と『帖史』

信天翁の日記に記されていないなかにも、信天翁の文人活動で重要なものがある。信天翁が会主となって催した古法帖展観会である。この展観会は明治一二(一八七九)年四月六日、旧京都大宮御所内博覧会品評所で開かれた。ここでは七四にのぼる京都を中心に関西地方の個人や書肆、筆墨商、寺院などが所有する碑法帖二九九件が出品された。幹事には熊谷鳩居堂直行ら七名の名がある。この展観会の出品目録は翌年六月に『帖史』として刊行された¹⁸。

『帖史』の封面は江馬天江、「尊書法旧」という題字は畑成文、口絵にある展観会場の略図は巨勢小石(一八四三—一九一九、京都生まれの日本画家)の画である。また序と跋は信天翁が自ら執筆している。

『帖史』をみると、出品者のなかには、岡本黄石・谷如意(鉄臣)、頼支峰、神山鳳陽、江馬天江、宇田栗園(一八二七—一九〇一)、熊谷鳩居堂(直行)といった、信天翁の交友関係で頻繁に登場する名がある。それだけではなく『帖史』で題字を書いた畑成文(古雪斎)は一人で五六件も出品している。このように、親友や彼らを通じて紹介されたであろう七四の関係者より二九九件の出品を受けて展観会が開かれたことは、信天翁にとって画期となるできごとであり、また京都文人サークルの広がり的一端を示している。



松浦武四郎

(松浦武四郎記念館蔵)

(二) 松浦武四郎との古物賞玩

さて、この信天翁が会主となった展覧会に出品した一人に、松浦武四郎（一八一八～八八）がいる。「松浦多気志楼」の名で《柳宗元碑》一点を出品した武四郎の日記では、この展覧会の様子を会主とは違う視点で記している。そこで日記の一節を以下に紹介したい。¹⁹

六日。博覧会品評所にて古墨帖の展覧有るが故に、余も柳宗元の需公の碑を携ふ。此碑は《脱》堂帖に出たれども、余が携る処は元頃にして頗る可誇もの也。別て上に朱印有。是柳州県庁の印なるが、考るに今此碑を拓すは禁ぜられしが、何故有て拓れば県庁にて見当の印を捺したる物に牆中燃しとする。また陳列したる中にも、西六条御殿よりの出品は十九品有りしが、王若本の淳化法帖、肅府本の淳化帖、其外何れも結構荒なし。宋摺、元摺、明摺まで也。新渡物一品をも見ず。其品を拝観人立ながらにして披見し居て打落し、また座して高き処の物を取落し等する。心なき事可歎の至也。また畑氏は五十九品出されしが、其内二十一品蘭亭帖の異品斗を出されたり。

山中信天翁が会主となつて開催された古碑法帖の展覧会の会場に、松浦武四郎も訪れた。自身が出品した作品、陳列品に対する評価、拝観人のマナーの悪さについて言及している。

また武四郎はこの翌日、嵯峨嵐山にある信天翁の対嵐山房を訪れ、信天翁の所蔵物を拝見している。

七日。(中略)山中翁に到り、爰にて日本古物数品を示さる。其内一尺七八寸の西行の像を抱て、是を知るやと問はる。余一目にして知ると云を、翁早々抱てまた奥に逃去る。実に可驚、依て余翁を責て曰く、今其寺は廃して礎のみなり。我に得させ給えと云を、翁未だ此品我が手に帰さず。此話しは止め給えと云て断はるゝが故に、座中両三輩客も有しかば、黙して話を転ず。鉄の壺鐙、是南都手向山八幡宮の旧跡也と云。翁また持て奥に去る。実に今日の談、翁をして少しも座に着せず。可笑々々。

古物自慢をする信天翁と、願わくばそれを譲り受けたい武四郎のやりとりの様子が面白い。武四郎は五月一六日の東山尚歌堂での古物会（幹事信天翁）に参加し、見聞を広めた。



古物会のように

(「尚古杜多」浪華岡本樓上評古小集之図(富岡鉄斎筆) 松浦武四郎記念館蔵)

十四日。西嵯峨。山中に到り明後十六日古物会を東山尚歌堂にて催由を談じ置。

十六日。今日尚歌堂にて古物会を催す。山中静逸、畑、森川、鳩居、在梅堂、桂花堂、西村、耀庵、山田、神田、伊谷田中、其外二十七、八人来る。頗る盛会なり。是ひとへに我が面目也。(中略) 会は夜に入、散す。

この古物会の出展物一覧は、武四郎が『尚古杜多』二冊の第一冊に記している。信天翁は、「天平年製香合」、自身の師・篠崎小竹の箱書がある「鎮殿」、「白雲集卷四大燈国師書」、「李唐八華鑑面鑄五大菩薩」の四点を持参した。またこの刊本のなかにも「葛原小遊」という題字を寄せている。

なお、図「古物会のように」は武四郎が同年五月六日に参加した浪華岡本宅での古物会の様子を示したものである。富岡鉄斎筆によるこの図のように、信天翁が会主となった古物会でも、いろいろな中国趣味の古物を各自が持ち寄り、熱を帯びた会となったことであろう。

(三) 信天翁の旧蔵品

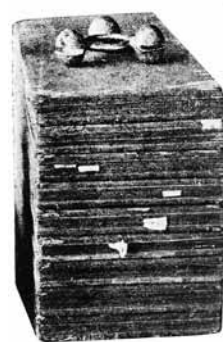
京都で活発な文人活動をしていた信天翁は、明治一八(一八八五)年五月二日に滞在先の東京にて死去した(六四歳)。信天翁には継嗣がなかったため、遊可夫人は嵯峨嵐山の邸宅・対嵐山房の地所・建物等を小松宮家に差し上げたいとする願書を、同年七月に提出したのであった(結局東本願寺別荘を経て対嵐坊と呼ばれる料亭になった)。

また信天翁の旧蔵品は、翌年六月に京都木屋町生亀楼にて悉皆入札にて売却することとなった。この件で世話人となったのは三人で、生前交流が深かった京都の熊谷鳩居堂や、山中家に仕え信天翁の知遇を受けた郷里・三河国碧海郡平七村の油谷又三郎らであった。

この悉皆入札を広告するために作成された「山中先生旧蔵品目録」(一五・九×一一・二cm、碧南市蔵)をみると、整理されたものだけで書籍(五〇点)、法帖(二二点)、書画(一七点)、器物(一五五点)、印材(石材遊印一五八顆)にのぼり、その他登録していないもので数百点あったという。

旧蔵品目録のうち、宣和秘閣帖という法帖や明人今釈行書七律という書画は、信天翁没後三〇年に信天翁を顕彰する為に刊行された『信天翁』(信天会)に図版で紹介され所在が確認できるが、多くの旧蔵品は他人の手許にわたることになった。そこで、本稿の最後に、この「山中先生旧蔵品目録」を掲載し、文人山中信天翁の所蔵品の一端を紹介することとしたい。

宣和秘閣帖

山中信天翁旧蔵品
〔信天翁〕所収

古銅品字鈴



五 おわりに

山中信天翁は「文人」と紹介されるものの、その実態については理解しづらい面がある。そこで本稿では、本展の成果を補足するため、信天翁の日記記事やそれ以外の史料から、信天翁の文人活動の実態をみてきた。

信天翁は明治六年に宮家の家令を辞し退隠する。退隠前は公務多忙ゆえか文人活動に関わる記事自体が多くはないものの、奥蘭田や山内容堂、松平春嶽、谷鉄臣（如意）といった人物と交友し、書画を展覧して楽しんだ。谷鉄臣との関係では、幕末以来の勤王思想が作品にも反映していることをみた。

退隠後は京都で積極的に書画を展覧した。幕末以来の交友関係の延長上として、板倉槐堂、岡本黄石、神山鳳陽、江馬天江、富岡鉄斎らと奈良・吉野を遊び、木戸孝允（松菊）とも交わった。大規模な書画会を展覧し、また出品し、次第に書画文玩を多く収集するようになる。そのうち、明治一二年には自身が会主となって古法帖展覧会を催したのであった。また松浦武四郎と古物賞玩をする一面もみられる。しかし、明治一八年に信天翁が死去すると、信天翁が生前収集した書籍・法帖・書画・器物は売却されるものもあつたのであった。

以上が信天翁の明治期における文人活動の内容である。これを冒頭に指摘した、同じく京都で活躍した江馬天江（一八二五～一九〇一）の事例と比較してみよう。²⁰

漢詩人または能書として知られる江馬天江は、近江に生まれ、幕末の国事に奔走したが、維新直後に退隠して、京都に居を構えた。信天翁の『帖史』、鳩居堂の熊谷直孝追善の『円山勝会図録』など、多くの書籍や合作に天江の書画をみることができる。また彼自作の印譜には兄・板倉槐堂の姓名印や雅号印をはじめとして、山本竹雲（一八二〇～八八）や小曽根乾堂（一八二八～八五）らの刻印を見ることができ、さらに彼は明治一七年に小堀遠州が作庭したといわれる退享園を有する邸宅に住んだ。天江が没した明治三四（一九〇一）年開板の『退享園詩鈔』には谷如意らによる序文がある。

このように江馬天江の文人活動をみると、そもそも同じ京都文人サークルゆえに信天翁と共通点がとても多い。幕末から明治初期に京都で活発な文人活動をした同世代の二人は、文人の幅広い活動のなかでそれぞれの得意分野で活躍したといえるであろう。

本稿では、当地出身の山中信天翁の文人活動についてみてきた。政治的な人脈を含みつつ、詩文書画や篆刻、煎茶といった分野を自由に行き来する文人たちの活動を踏まえて作品を鑑賞することも必要ではなからうか。

鐵壺研表面



鐵壺研裏面



青銅鍍金共蓋經筒(高一尺二分 胴徑四寸一分)



(註)

- 1 『歴史系企画展 没後一三〇年 山中信天翁と幕末維新』(碧南市教育委員会文化財課、二〇一五年)。
- 2 明治六年の退隠までの山中信天翁の経歴については、拙稿「文人山中信天翁の誕生——誕生までの軌跡——」(『山中信天翁』公益財団法人天門美術館、二〇一七年刊行予定)を参照のこと。
- 3 刊行図録は、『文人画の近代 鉄斎とその師友たち』(京都国立近代美術館、一九九七年)、『企画展 知られざる日本絵画——シアトル白澤庵コレクション』(大津市歴史博物館・ワシントン大学出版局、二〇〇一年)、成田山書道美術館監修『近代文人のいとなみ』(淡交社、二〇〇六年)。
- 4 『國華』九六六、一九七四年。脇田氏が紹介した画は『松石霽之図』一八八四年、紙本墨画淡彩、掛幅、一三八・四×三三・七cm、倉敷市・荻野休次郎氏蔵(当時)。なお引用にあたり歴史的仮名遣と旧字体を現代のものに改めた。
- 5 加藤類子「鉄斎とその師友たち」(『文人画の近代 鉄斎とその師友たち』京都国立近代美術館、一九九七年)。
- 6 スティーヴン・アデイス「南画後期の三人の個人主義画家達(前編)」(『三彩』一九九一年五月号)。
- 7 長谷川瀟々居『煎茶志』(平凡社、一九八三年覆刻初版)、宮崎修多「著識図録の時代」(『季刊文学』七—三、一九九六年)。
- 8 図版解説 葛微奇筆水墨山水図「東京 松岡於菟衛氏蔵」(『美術研究』一六、一九三三年)。
- 9 松平春嶽と信天翁との関係については、志賀太郎「明治二年序『書画帖』を読む——めくるめく文人の世界——」(『福井市立郷土歴史博物館 研究紀要』一〇、二〇〇二年)。なお、志賀氏は「明治以降、春嶽は静逸を文人として高く評価し、交流を続けたようである。(中略)春嶽にとって(大沼)枕山・(鱸)松塘に並ぶ文人として認識されていたことは間違いないであろう」(一)引用者追加とする。大沼枕山・鱸松塘は、この書画帖で信天翁の前に登場する揮毫者で、二人とも梁川星巖とも近く、信天翁との交友も考えられる。
- 10 『明治天皇紀』第四(吉川弘文館、一九七〇年)。谷如意については成田山書道美術館監修『近代文人のいとなみ』(淡交社、二〇〇六年)八九頁。
- 11 『開館1周年記念特別展覧会 長浜曳山まつり——襖絵の美——』(市立長浜城歴史博物館、一九七九年)。
- 12 こうして完成した碑が、京都霊山護国神社内に現存する銅鑄碑、霊山表忠碑(明治一二年建立)である。
- 13 以上、小林文広『明治維新と京都——公家社会の解体——』(臨川書店、一九九八年)。
- 14 茗議席での勤王志向については、西嶋慎一「煎茶趣味と書画文玩の鑑賞」(10文獻)などで既に指摘されている。
- 15 妻木忠太編『木戸孝允日記』第三(一九三三年、早川良吉)。
- 16 長谷川瀟々居『煎茶志』(平凡社、一九八三年覆刻初版)一三九—一四〇頁。
- 17 (15)文獻。
- 18 山中献編「帖史」国立国会図書館デジタルコレクション。出品者は次のとおりである。

【巻之上】

大谷六華書室	妙法院	知恩寺	大通寺	松陰堂	西養寺	神光院
長 雲石	小栗布岳	松本白華	龍野竹醉	中村淞北	中川淡二	高瀬石涯
片山精堂	福井崇蘭館	三角槐陰	吉田有喜齋	中西耕石	安部井樸堂	山本竹雲
筱田芥津	山本溪堂	田中東濤	竹村氏	井口碧雲	下村氏	渥美氏
大塚氏	並川立齋	並岡五岳	初川雅宜	關口老雲	荻谷氏	雨森醉墨
大江氏	内貴竹厓	永田文昌堂	高橋陽華樓	〔東京〕松浦多氣志樓	〔参河〕山中竹処	

〔参河〕山中竹処

〔浪華〕松村文海堂

〔和泉〕税所鵬北館

【卷之下】

畑 古雪齋

宇田栗園

森川清冷

熊谷在樸堂

松浦武四郎著稿本『己卯記行』松浦武四郎記念館蔵（己卯記行）松浦武四郎記念館、二〇一五年）

20 以下(10)文献【五】江馬天江とその周辺 による。

〔越前〕片山氏

〔浪華〕鹿田松雲堂

〔浪華〕金尾文淵堂

谷 如意

中金寄梅

中村二翠

山中対風山房

伊勢小湊

市村強堂

遠山廬山

〔浪華〕藤田氏

〔浪華〕金尾文淵堂

〔浪華〕後藤祥雲堂

〔和泉〕新川定一

頼 支峯

山添蟬軒

佐々木竹苞樓

北村文石堂

杉田萊山堂

神山鳳陽

山田永年

江馬天江

神田香巖

〔浪華〕後藤祥雲堂

〔和泉〕新川定一

〔浪華〕金尾文淵堂

〔和泉〕新川定一

〔浪華〕後藤祥雲堂

〔和泉〕新川定一

〔浪華〕金尾文淵堂

〔浪華〕藤田氏

〔浪華〕後藤祥雲堂

〔和泉〕新川定一

〔浪華〕金尾文淵堂

〔浪華〕藤田氏

〔浪華〕後藤祥雲堂

〔和泉〕新川定一

〔浪華〕金尾文淵堂

〔浪華〕藤田氏

〔浪華〕後藤祥雲堂

〔和泉〕新川定一

〔浪華〕金尾文淵堂

〔浪華〕藤田氏

〔浪華〕後藤祥雲堂

〔和泉〕新川定一

〔浪華〕金尾文淵堂

〔浪華〕藤田氏

〔浪華〕後藤祥雲堂

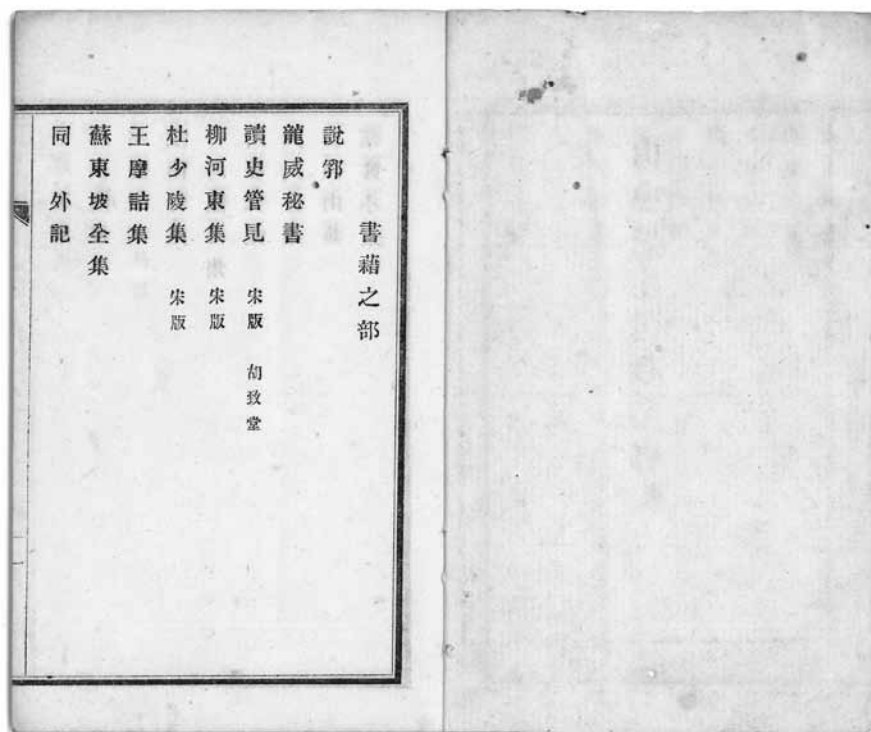
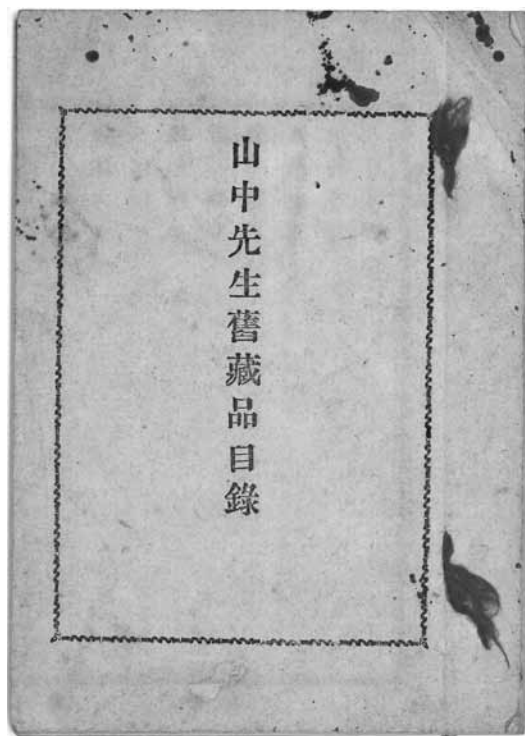
〔和泉〕新川定一

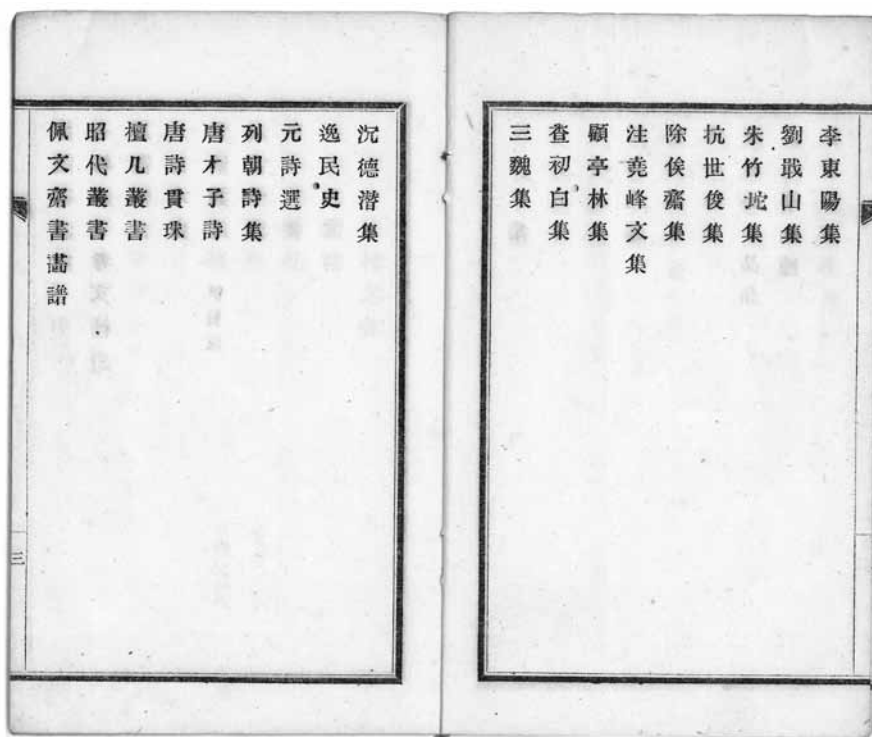
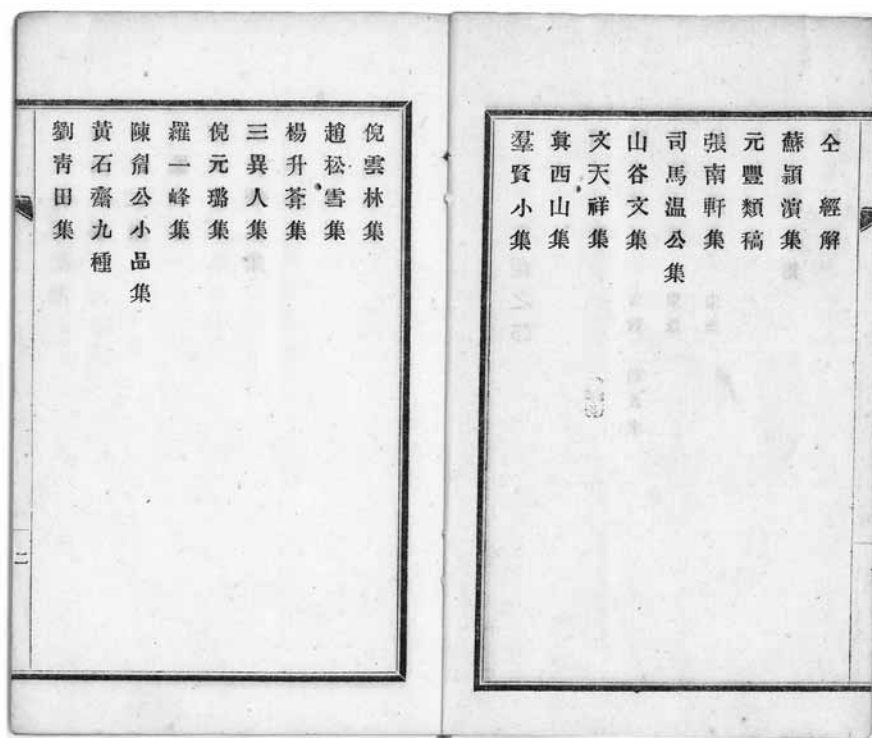
（付記） 本稿は平成二七（二〇一五）年一月から三月にわたり碧南市藤井達吉現代美術館で開催した「没後一三〇年 山中信天翁と幕末維新」展の展示作品調査の過程で明らかになったこと、並びに企画展の開催を契機としてご教示を得たことなどを纏めたものである。その折ご協力を賜った所蔵者並びに関係者の皆様に厚く御礼申し上げる。

国立国会図書館 福井市立郷土歴史博物館 松浦武四郎記念館

福永昭 山本命

参考資料『山中先生旧蔵品目録』（明治一九年、碧南市蔵）





徐霞客遊記
七經孟子考文補遺
群書類從
大日本史
資治通鑑
伊勢版
集古十種

法帖之部

淳和秘閣帖
宣和秘閣帖
停雲館帖
腕香堂蘇帖
曹景完碑
寒鶴銘
智永二體千字文
顏真卿多寶塔碑

山名公卿
三條公卿

四

全華嶽題名
全郭氏家廟碑
全顏氏家廟碑
澄清堂法帖
懷素自叙帖
皇甫府君碑
清嘯閣帖
五老帖
墨珍集

宮内省

表忠觀碑

山谷大江帖
千墨庵帖
因宜堂法帖
書畫之部
明人今釋行書七律
竹田果蔬草蟲卷

春川

題小石
縣山陽

五

座無此公詩畫卷
 遼若山河半江畫卷
 竹田水墨百蟹卷
 明洪朱泚淡彩山水幅
 明唐仲和文書幅
 王思任行書紫芝之賦大卷
 傅天祐草書七律幅
 霞樵水墨山水雙幅
 畢焦麓仿米虎兒水墨山水幅

題山陽紙中竹田春琴海仙
 山陽雲華小竹其他數名合作
 題小竹
 題初陰小竹
 金箋豎物
 紙本橫物
 紙本
 絹本豎物
 絹山陽舊藏
 紙本豎物
 紙本豎物

源俊賴卿古今集和歌三首切幅
 寧一山墨跡
 中峰禪師行書墨蹟
 無款水墨葡萄幅
 張即之行書幅
 大燈國師行書墨跡

紙本橫物
 紙本橫物
 絹本豎物
 紙本橫物
 紙本橫物
 紙本橫物

器物之部

歛石古研
 七絃琴
 全
 全
 古代品字鈴
 古代銅經筒
 青銅文昌帝君像
 天平年製蓮華繪香合
 古代銅經筒

玉堂舊藏
 竺菴撰古琴桐義敘
 銘曰天風海濤
 山本梅逸翁舊藏
 鍍金無款
 明朱舜水將來
 款曰文治四年四月二十五日

古銅方壺
 南都時代小簞筒
 古代鐵馬具
 本邦古鈴

古谷石
 古鈴

館書四季草花
 十二箇
 十箇
 十四箇
 實抽直連石ト云山陽ノ銘
 并書翰二卷ヲ添

六

七

印材之部
石材游印 内譯

百五十八顆

栗齋刻	仙嘯刻	逸雲刻	林谷刻	山陽刻	芙蓉刻	四顆
三顆	一顆	一顆	五顆	三顆	四顆	

小竹刻	陶齋刻	吳策刻	秋堂刻	利其器齋刻	王克三刻	信天翁刻	卓齋刻	棟堂刻
一顆	二顆	五顆	一顆	一顆	一顆	五顆	一顆	三顆

八

刻者不詳	源伯民刻	汪秀峰刻	雪漁刻	葛澁刻	石麓刻	山堂刻	大典刻
百十三顆	二顆	一顆	一顆	一顆	一顆	一顆	一顆

水昌 象牙 銅
扶桑 竹根 磁
刻者不詳
貳十二顆

右ハ故山中先生ノ舊藏品ニシテ其他登錄セサルモノ數百點アリ本年六月一日ヨリ三日迄京都木屋町生龜樓ニ於テ悉皆入札ヲ以テ賣却セントス因テ大方諸君ニ廣告スト云

九

